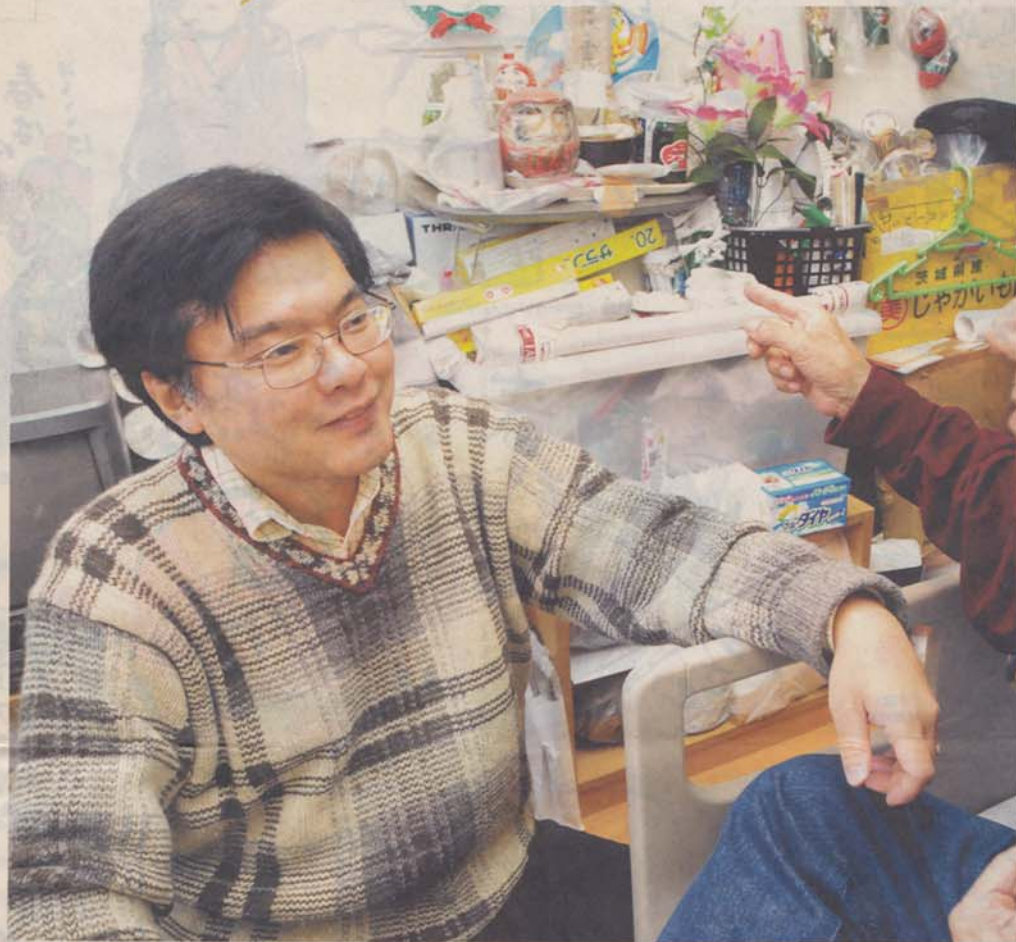


人生の唄が聞こえる

文・橋本 克彦
(ノンフィクション作家)



「人への不信任を持つ同居者たちに愛情のシャワーをかけて、心の凍土を溶かしたい」。優しい表情で、居者の話に耳を傾ける山本雅基さん。左＝東京都台東区清川の「きぼうのいえ」で（撮影・池田千恵子）

ホスピス「きぼうのいえ」施設長

山本 雅基さん(43歳)

施設長の山本さんは、広き四畳半ほどのSさんの部屋で談笑していた。壁際にベッド、もう一方の壁には、いろんな物が置いてある。Sさんは独特の節回りで、演説みたいに話す。「紙コップは地震のとまげさんが使うためのもの。食堂のテーブルふきに使うトイレットペーパーもありません。ここにあるのが私の位牌」

「妻の貯金を手元に銀行から借金し、キリスト教教会やボランティア組織ほか、多くの皆さんから寄付をいただきました」

在宅ホスピスケア対応型集合住宅と山本さんがいう「きぼうのいえ」では、通院と担当医の往診で、入居者の医療的バックアップを行う。入居者のほとんどが、さまざまな理由で「山谷へたどりつき、人生の最終章を迎えよう」としている老人たち。彼らは福祉関連機関や病院などからこまめにケアを受けている。

「悲しみの底をはいすり回ってきただ人と一緒に、ほくも泣きながら、生きるって、そんなにひどいことじゃないよって、いえればいいと願っています。なかなかその境地になれない」

若くしては哲学生年だった。二十一歳のチェシヨウベンハウエル、文学ではドストエフスキー、トルストイなど、何でもむさぼり読んだ。「哲学で生きる価値をみつけよう」としていました。一種の引きこもり少年

転機は乗員乗客五百二十人が死亡した一九八五年八月の日航機墜落事故だった。御巣鷹山からの実況ニュースを見て、涙が止まらなかった。「泣きながら、それまでの自分が、どこか高みから人生をのぞいていたことに気づいたのです」

聖職者を志望して上智大学神学部へ。卒業後、特定非営利活動法人(NPO法人)「ファミリーハウス」の事務局長を経て、山谷へ。上智大学社会人講座で知り合った妻の美恵さん(当時「看護師」とともに、これまで四十五人の「旅立つ人」を送ってきた)と出会った。

山本さんは捨て猫を見たら拾ってしまつ子も多かった。くし刺しの焼き魚が焼死体に見えて泣き出す子どもだった。

入居者のケアは喜びだが、中には、この事業を悪意で解釈し、スタッフに当たり散らす人もいる。山本さんも人間だから怒る。疲れが、もつれようかと、夫婦二人で旅に出たこともあった。

がんやその他の病気が重く、生涯を閉じようとしている入居者たち。どこまでもその人々に寄り添うこと、と思いつめて帰ってきた。

山本さんの著書「山谷でホスピスが始まりました」(実業之日本社)には、見送った人々のその時が描かれている。

「ねえ、丁さあーん、もう逝っちゃうの？」

と臨終のときに声をかけたという。この会話が成り立つまでに満たされた関係が「きぼうのいえ」の日常である。

Tさんは山谷の仲間たちの面倒をよく見る人望家だった。遺骨は台東区の共同墓地に納められた。

どういまでも寄り添う

【連絡先】〒110-0022 東京都台東区清川2-29-12、きぼうのいえ(電話)03・38875・7522